

オンライン上で約4000社の企業に仮想オフィスを提供するoVice（オヴィス、石川県七尾市）のジョン・セーヒョン最高経営責任者（CEO）にポイントを聞いた。

新型コロナウイルス禍で普及したリモートワーク。コロナが感染症法上の分類で5類に移行した5月以降は出社復帰の傾向も目立つ。業務効率化のためにオンラインとリアルをどう使い分けるべきか。

遠隔勤務と出社を使い分けるには

適切な評価制度が必要

リモートワークの課題に回帰し、実施率も踊り場の状態だ。今後は本格的にリモートワークを導入していく企業と二極化し、業績でも差がついていくのではないかと。以前の状態に戻るのには簡単だが、新しい時代の柔軟な働き方は業務効率化に加えて人材確保の面でも影響は大きい。

「もちろんリアルでの会議などでは前後の時間にする世間話などのささやかな交流から思わぬ発想が生まれることがある。大人数が参加する場合はオンライン会議は集中できず、アクティブに参加しない傾向もある。リアルの価値を踏まえた上で、オンラインで効率化できる部分を見つけた企業は以前の働き方に戻ることはない。活用が広がるというより深化していくとみる」

アイコン使い意思疎通を密に

「オンラインツールを使う際のマナーは、オンライン会議の際のカメラのオンオフは新しい時代余計な体力を使う」「役職が高い人ほどカメラを付けたがるがこれは非効率だ。人柄を見てもう初対面の時や、真剣な内容を表情を持って伝えたい際には良いが、カメラをオフにするケースが主流になりつつある。これも暗黙のルールをうまくつくることが重要だ。やっていいことよりもやらない方がいいことを決めることがポイントだ」

仕事に効くスキル

「自動車や電機など多くの大企業が導入し、各社はコミュニケーションの価値に重きを置いている。社内コミュニケーションの効果を最大化することが目的だ。普段交流しない全国各地の従業員が対話するハードルを下げ、新しい価値を生み出すきっかけをつくるという思惑もある」

「実際オフィスでもデスクを固定しないフリーアドレスを導入する大企業が増えてきている。サービスや商品を生み出す創造性の基になるコミュニケーションをいかに増やすかという視点や目的を明確にするのが大事だ。この点で物理的な制約のないオンラインでの交流促進は活用次第で大きな力になりうる」

リアルとオンラインの使い分けに必要なこと	
リモートワーク導入の目的を明確にして一律でオンライン化しない	
リアルでの作業価値を考えた上で業務効率化に適したオンラインツールを導入する	
オンライン活用の割合や場面などをルールで縛らず、柔軟性を持って判断する	
過程より結果を見るための適切な評価制度を構築してリモートワークしやすいようにする	
顔が見えないコミュニケーションにデメリットを感じるなら他の手段で解決する	

(出所) ジョン・セーヒョンCEOへの取材を基に作成

「オンライン会議などでは相手の顔が見えないことでモヤモヤすることがあるだろう。しかし本来は顔を見ることで目的ではないはずなので他の方法で解決できれば問題ない。『いいね!』など反応や感情を伝えるアイコンをうまく使い、コミュニケーションを円滑にしていきたい」

(聞き手は松井亮佑)

ジョン・セーヒョン 1991年韓国生まれ。日本の大学在学中にIT企業を設立し、2017年に上場企業に売却。20年にNIMARU TECHNOLOGY(現oVice)を設立した。



oVice CEO
ジョン・セーヒョン氏